

日本市場におけるWindows NT普及の可能性

当社は、STAR-IIIと呼ぶ証券会社向けの共同利用システムへのWindows NTの採用を発表した。現行システムからの移行ではあるが、完了時には3,000端末すべてがWindows NTを利用することになる。この世界最大規模の導入事例を踏まえ、システムインテグレーターの視点からWindows NTの普及の見通しについて触れてみたい。

コスト面で有利なWindows NT

Windows NTの普及のカギは3つ存在する。

第1は、NetWareに代表されるパソコンLAN（構内情報通信網）のネットワークOS（基本ソフト）を代替するというシナリオである。ここで焦点となるのはNetWareとWindows NTとのコスト効果の比較である。

現時点では、価格面で両者に大きな開きがある。NetWareで100クライアントのシステムを構築する場合と比べて、Windows NTを採用した場合は最大100万円ほど低価格になる。しかもWindows NTのネットワーク管理はGUI（グラフィカル・ユーザーインターフェース）ベースになっており、ユーザーにとってはNetWareよりも使いやすい。

日本では、現行のWindows 3.1に対応するWorkgroup for Windowsが製品化されていないことが接続性の面でややネックだが、反対にWindows NTの価格的なメリットが強調されている。米国ではピア・ツー・ピア（対等通信）型のLANを選択するユーザーは、Windows NTよりもむしろWorkgroup for Windowsを選択するだろうが、日本ではこれがないので、Windows NTのユーザー層に広がる可能性がある。

豊富なツールが提供されているWindows NT

第2は小規模なアプリケーションサーバーとして普及するというシナリオである。現在、従来のオフコン市場は低調だが、オフコンに代わる新しい概念の製品がまだ明確になっていない。オフコンを代替できるような解決策をWindows NTとアプリケーションソフトの組み合わせで提供できれば、Windows NTが普及するポテンシャルは十分にある。

米国には元来オフコンはなく、NetWareなどのネットワークOSをベースに解決策が提供されている例が多い。しかし、現状でアプリケーションサーバーとしての優劣を考えると、SDK（ソフトウェア開発キット）などのツールが豊富に提供されているWindows環境の方がNetWareよりもかなり有利である。

注目される金融機関の動向

第3は大規模ネットワークシステムに普及するというシナリオである。たとえば、金融機関の大規模ネットワークにWindows NTが採用されるといった場合である。日本では1990年前後に稼働を開始した第三次オンラインシステムが更新期に入りつつあり、金融機関の新規システム導入が最も注目される。

[著者・執筆時所属]

野村総合研究所

システム商品事業部

楠 真 (くすのきしん)

[著者現職]

野村総合研究所

執行役員

金融フロンティア事業本部長

兼プロジェクト開発部長

大手金融機関はいずれもパソコンの大量導入によりエンドユーザー・コンピューティングを充実させる方向を考えているが、このための選択としては次の3つの方向性がある。

- ①サーバーにUNIX、クライアントにはWindows 3.1
- ②サーバー、クライアントともOS/2
- ③サーバー、クライアントともWindows NT

現状では一部の都市銀行が①でシステム開発を進めているほか、②を選択している銀行もある。当社がSTAR-IIIで選択するのは③とはやや異なるが、Windows NTの大量採用を明確にしている点では③と同義である。

3つの方向性のうちどれを選ぶかという問題は、金融機関の情報システム部の伝統的な考え方を考慮して予想しなければならない。

日本市場で普及する可能性は大

米国では、金融業界にUNIXベースのアプリケーションソフトがかなり広まっている。特にウォール街では、サン・マイクロシステムズ社のワークステーションとサイベース社のデータベースを組み合わせたアプリケーションが幅を利かせている。

金融業界に限らず、米国市場ではビジネス分野のUNIXベースのクライアント・サーバーアプリケーションがかなり普及している。こうした状況でWindows NTが市場導入されても、UNIXを置き換えていく動きにはなり

にくい。もともとクライアントにはWindowsがたくさん利用されており、Windows NTの出番はなかなか出てこない。

ところが、日本ではまだビジネスUNIXが普及していない。日本のユーザーはこれからUNIXベースのアプリケーションを本格的に導入するよりも、見慣れた親近感のあるGUIを提供するWindows NTを導入する可能性が高いと思われる。

結論をいえば、日本市場でのWindows NTの普及については、米国市場よりも楽観的に見ることができる。これは、Workgroup for WindowsやUNIXのような、Windows NTと市場を分け合う競争相手が浸透していないという理由による部分が多い。

しかし本格的な普及のためには、システム全体の稼働を保証するシステムインテグレーターの役割が強まることが前提となる。マイクロソフト社が当社を始めとするソリューションプロバイダー32社と提携した狙いはここにあるだろう。

今後、システムインテグレーターがハードウェアとソフトウェアを含めたシステム全体の稼働を保証するという概念の市場が形成されていくなれば、大型ネットワークにおけるWindows NTの本格的な普及が期待される。

Windows NTを採用した前例が定着することにより、一気に普及へと結びつく可能性は高い。
(楠 真)